

永田町新潮流 平沢勝栄



新型コロナウイルスによる感染が拡大の一途だ。日本政府は自国民救出に、いち早く取り組んでいる。しかし、世界には医療や防疫の体制などが不十分な国も多い。日本はこうした国に対する可能な限りの支援を進めるべきだ。

1985年、イラン・イラク戦争下で、多くの日本人がイランの首都テヘランに取り残された。その時、トルコは特別機を出し、自

国民に優先して日本人を出国させてくれた。日本はそうしたご恩を忘れてはならない。ところで、先月、私は河村建夫代議士(衆院議員)に同行して韓国を訪問した。韓国では文喜相(ムン・ヒサン)国会議長や新旧の国務総理(首相)などと会談を持った。

誰かが日韓の現状を憂えていた。しかし、根強い「反日」

の世論や4月に行われる国会議員の総選挙を考えると、徴用工問題などをめぐる問題の解決は容易ではないようだ。

こうしたなかで、前国務総理の李洛淵(イ・ナギョ)氏とは長時間にわたり雑談したが、李氏の話は大変、興味深かった。

李氏は東京駐在特派員の経験があることから、日本の事情には極めて精通している。山口百恵や吉永小百合の歌などは完全に語(そら)んじていた。

李洛淵氏(左)には「死に物狂い」での日韓関係改善が期待される

李洛淵氏(左)には「死に物狂い」での日韓関係改善が期待される

# 李前国務総理に日韓関係改善を期待



## 何人も人の名を覚える人心掌握術

その李氏は「30人くらい名を覚えていた」と評論家の故・扇谷(おうぎや)正造氏の本にあったと記憶していた。韓国に駐在する日本のマスコミの代表ら16人と懇談した時は、その場で全員の名前を覚えたそうだった。

私は李氏に「どうやって名前を覚えるのか」と聞いてみた。答えは「何事にも死に物狂いで取り組めば、できないことはない」だった。

懇談を終えて河村氏と私は李氏と一緒に外に出た。そこで、李氏は数十人の若者につかまって、もみくちゃにされていた。李氏は今のところ次の大統領候補では断トツの1番と聞くと、果たして「李大統領」は誕生するのだろうか。

(自民党衆院議員)